



異界の声をきく

写真—藤本巧 解説—樋口淳・滝沢健次

韓国・朝鮮寺に神を招く

冥界の使者をかたごる二体の依代（よりしろ）



長鼓をうち、神々に低く歌いかける。

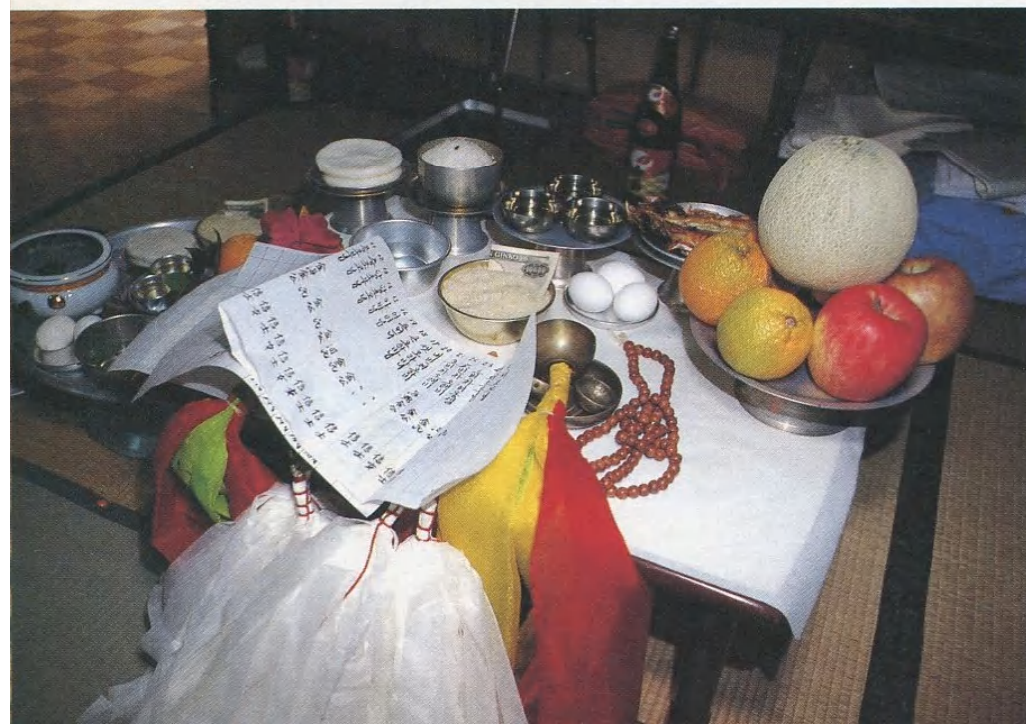


布の橋をめぐらし、あの世からの道をつけ、冥界の支配者、十王の祭壇をととのえる。



あざやかに翻る、白い布の橋に引き寄せられ、死者はこの世に降りたつ。(上)

祖霊のよりつく緑の小枝を手にした巫女の言葉が、ひびきわたる。(右)



「クツ(神降ろし)」は、五日間にわたって行われた。初日は、神々を降ろす「初監祭(チヨガムジェ)」、二日目は成人をはたさずに逝った死者を慰める「プルトマジ」、三日目以降が冥界の十王とともに祖霊を迎えて祭りをを行う「十王祭」である。

「クツ」を主宰するシンバン(男巫)にも祖先の祭壇があり、さまざまな祭具が供えられている。

穢れを祓い、神意を占う

シンカル（幣束）、サンパン（神銭）、ヨリヨン（鈴）は、シャーマンの三種の神器である。シンカルの先の神刀とサンパンで神意を占う。



願主の穢れを祓う「セドリム（邪祓い）」は、クツのあいだ、何度もくりかえされる。



シンカルの呪力で、邪気を祓う。



布にわだかまるいくつもの結び目が解けると、穢れがおちていく。





道を拓き、橋をかけ、地獄の十二門が姿をあらわすと、十王祭が山場をむかえる。

ずらりと並んだ祖霊の食事。三十人前にあわせて雑鬼の膳も用意される。右手の筒は霊の依代である。



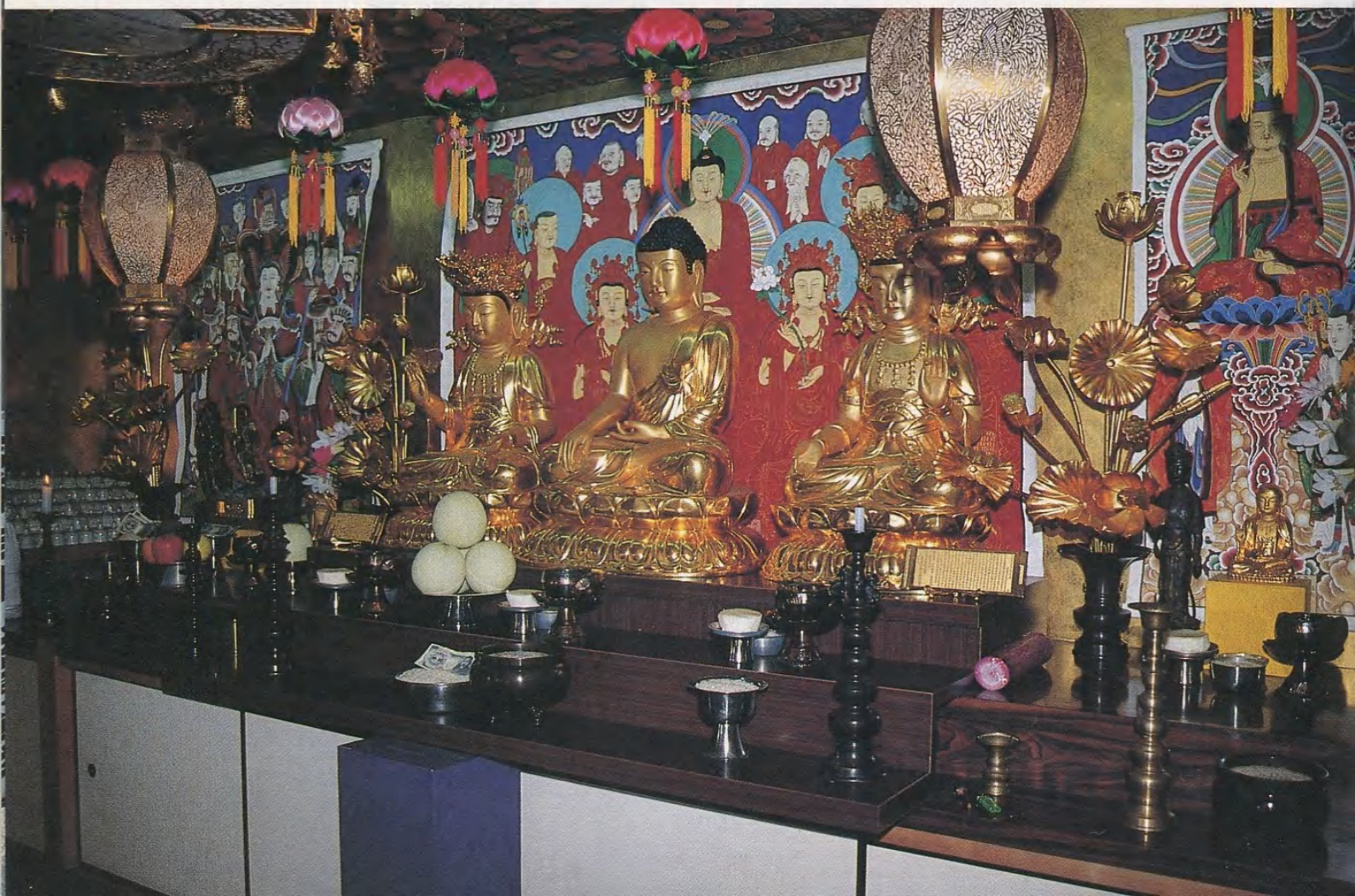


冥界の使者の旗をかかけ、祖霊に呼びかける。



祖霊があこの世の門番に払う紙銭と現金が、地獄の門にかけられる。

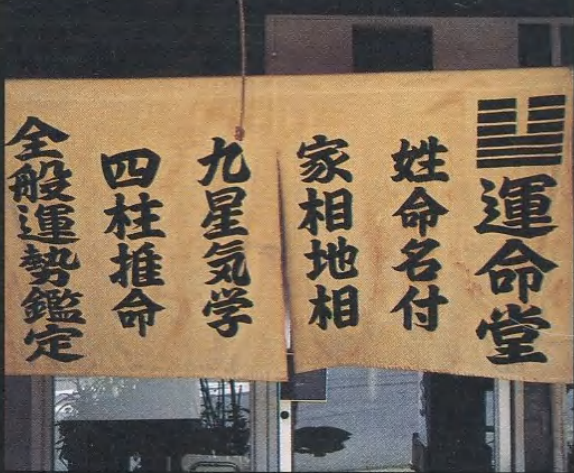
本堂を彩る仏たち。中央に阿弥陀三尊、左奥に不動明王、右端に地藏菩薩。奥に山神、星神がひかえる。





「辻占総本社」瓢箪山稻荷の占場。ここに立ち、行き交う人の声をきく。

辻占総本社から易者の町へ



境内に神を護る、狐もまた異界の声をはこび使いである。



占場で耳にした言葉をもち、宮司の託言がくだされる判断所。

伝統を生きたる石切参道「易者のまち」の暖簾。

霊視を得てする「金の鈴・銀の鈴」の店先には、金色のレースが翻る。



子どもの病にもいろいろあるが、漢方薬に任せなさい。

「病気の原因は医学では判らない」。力強い占いの基本です。



占いの店内にも、燦然とかがやく仏の威光。

生駒は、古くて
新しい庶民の異
界である。大阪
のエネルギーを
一手に引き受け、
激しく鼓動する。
今日、神はなに
を語るか？



あわただしく御百度をふむ、石切さんの信者たち。

参詣者の立ち小便よけに窪地に新設された「耳の神様」も、大繁盛。

